

火災にまつわる話

冬は、暖房器具などを使うため火災が起こりやすく、そのうえ、四国では空気が乾燥し、季節風が吹くなどして、火が燃え広がる条件が高まります。くれぐれも火の用心が必要です。今回は徳島県つるぎ町の真光寺の火災と高知県中土佐町の久礼大正町市場の火災にまつわる話を紹介します。

■真光寺の火災（徳島県つるぎ町）

昭和20年（1945）1月29日午後8時、貞光町（現つるぎ町）の真光寺本堂で火災が発生しました。当時、真光寺には大阪市立南恩加島国民学校3・4年生29人が疎開しており、このうち16人が焼死しました。火災発生時に大人は一人もおらず、火災を知った児童は逃げようとしたものの、寺の雨戸はなかなか開かず、勝手も分からず逃げ遅れて窒息死したようです。戦後間もなく貞光町の人々が募金活動を行い、昭和21年（1946）に同寺の境内に十六地蔵尊が建立され、毎年手厚く法要が行われてきました。南恩加島小学校からは、平成17年（2005）に寺近くの貞光小学校に「十六地蔵尊に由来する平和を願う鐘」が寄贈されています。＜参考資料：貞光町史編集委員会編「貞光町史」1965年など＞



■久礼大正町市場の火災（高知県中土佐町）

中土佐町の久礼大正町市場は、明治時代の中頃に漁師のおかみさんたちが旦那や息子が捕ってきた小魚を売り出すようになったのが始まりです。この市場周辺は、大正4年（1915）1月8日午前1時、八幡町から出火し230戸が焼失する大火に見舞われました。この報は天聴に達し、大正天皇より救恤（きゅうじゅつ）金350円が下賜されました。これに深く感激した町民は、それまでの町名である地蔵町通りを改めて大正町と命名しました。大正町市場の入口には大正町市場の由来書が掲示され、その下には万一に備えて井戸が設置されています。＜参考資料：久礼大正町市場の由来書及び久礼尋常高等小学校編「久礼読本」1939年など＞

